

福生珠算学校三十年

山崎茂男

その一 そろばん会別科生

昭和二十二年の春

昭和二十二年三月八日の、そろばん会発会の時のことは、今でもはっきりと記憶にある。

当時の、福生第一小学校の玄関に入って、すぐ左の教室が、その会場であった。春とは、まだ名ばかりの気候であったと思うが、はりきっていた私には、その日の寒さは覚えがない。

人にものを教える、などという経験はまるでなかった私だ。が、当時の子どもたちの生活の荒廃ぶり、自らも含めた若者の無気力であった毎日に觸れていて、みんなと何かをやってみたい、と考えた。思いつくとぱっと動くむてっぽうさと、軍隊帰りの純粋さで、さっそく町の角かどに、そろばん会員をつのるポスターをはった。かつて商業学校でいくらかそろばんをいじったことのある、それだけがこの際の行動の原動力であった。

かくして、この日の集まりとなったものだ。この日の席についた会員は、男十三、女十六の合

わせて二十九名。役場の職員や、農業、商業など家事手伝いの青年たちであった。

主催者が未経験者なので、この日、講師を依頼しておいた。私の小学生時代の恩師、山崎彦尚先生（現・青梅市教育長）をお迎えした。その席に先生は、まえに戸倉小学校で指導し育てた、愛弟子の橋本えい子さん、また、私が小学生の時、先生に珠算の指導を受けたその仲間で、当時三級に合格していた、鳥海三江、高崎秀子、武内達子さんたちにも、応援団として出席を頼んでおいてくれたのだった。それらの人が勢揃いして、なごやかに、また厳肅に発会式がすすめられ、初の学習も行なわれた。

会は、翌日から猛練習に入った。同月二十五日には、青梅市から、久保木、中村、原島の三青年が応援にかけつけてくれた。三人は、おたがい小学生の時、青梅の優秀選手として、福生の小学校珠算競技会に、何回か模範出演してくれて、その際しりあつた人たちであった。さらに二十九日には荒川区から、都内の珠算教師で知られていた松岡慶助先生（現・巣鴨女子商高校長）がはるばる、その指導をかって出てこられた。松岡先生は大学の時の友人であったが、このあともたびたび福生までかけつけてくれて、都内の珠算教室の指導ぶりなど、公開してくれた。当時、電車も思うように走っておらず、荒川から福生まではひどく遠隔地の感じだったので、先生のご苦労は大変なものであった。

四月の十日には、地元小学校の岩下伴蔵先生（現・氷川小学校長）が見えた。その時の岩下先生

の一言が、今日これらの記録を私が残せるもとなつた。「出席をとっているかい。すべての記録をしておくことだぞ。」というようなことを言われた。そういうものかな、とそれからは、できるだけ何ごとも書きのこすことを心がけた。こうした人たちの強力なご援助を得て、そろばん会は、細ぼそながら、たしかな歩みを印していった。

このころ、私は山崎彦尚先生のおすすめで、身のほどもわきまえず、私の母校である福生第一小学校の教師に就職した。しかし、この小学校の先生は私には荷重で、わずか一年で退職してしまつた。

そろばん会報 第一号

五月に入って陽気がよくなつてきたころ、進駐軍兵士の夜間外出が自由となつた。治安不穩の世相で、会員の身の上に危険があつてはと、おたがいが注意しあうよう話しあつた。

若い者の集まりであつたので、そろばんのけいこ後は、世間話に花が咲いた。雑談の中味は、世相のこと、若者の生き方、ポツポツ書店で手に入れることのできるようになった文学書のことなどであつた。ただ話すだけでなく、俺たちもなにかを書いてみよう、と提案したら、皆が賛成した。原稿用紙を手に入れて、それに皆で自由な文章を書き、綴じて回覧した。その表紙には、『そろばん会員文集第一号』とした。現在の月刊『ふっさっ子』の始まりであつた。七月二十三

日がその記念すべき日である。

このころ、戦後の教育制度の改革で、義務教育に六・三制がしかれ、二十二年四月に、町立福生中学校ができた。その中学校の教室は、しばらくの間、小学校東側の、新校舎とよばれていた二階建の六教室が使用され、小・中学校同居であつた。

その中学生徒五名が、この会に入会を申入れてきたのは六月二日であつた。そしてまもなく、小学六年生も何名かが加わつてきた。

第一回の検定受験

六月二十九日には、このそろばん会にとって初の、珠算検定受験生が、国鉄お茶の水駅を下りて東京大学まで行き、受験に参加した日であつた。その成績が七月十日に発表され、遊佐栄子、細谷米子、大塚和子、白井君江の四君が三級に合格した。福生そろばん会三級合格者第一号である。

七月二十八日に、中学校の田中貞雄先生（現・福生第二中学校長）を中心に、福生中学校第一回珠算競技会が開かれ、私もそのお手伝いをした。この時、総合成績で村野久子が第一位、細淵米子が第二位となっている。

夏休みに入つてからのそろばん会は、前記の松岡先生のほか、都内からの専門の先生のご指

導を受けた。松岡先生の恩師である藤田晃司先生が、先生のお弟子中から選抜された優秀十数人を引率してこれ、福生の会員やその父母に模範演技を公開してくれた。会場は小学校前の青年団クラブであった。その時の神技ともみえた競技ぶりに、私をはじめ出席者全員、まことに驚嘆させられた。そしてそのまま福生のそろばん会員に最上の刺激となった。

そろばん会からそろばん塾へ

二十三年二月から、しだいに増してきた会員のうち、小・中学生とそれ以上の年齢者とのクラス別をはっきり分けた。小・中学生は普通科に、そのほかは別科生とした。三月からは、そろばん会の会費を集めることにした。純朴な町の人たちは、ときに私の家に、畑でとれた作物やら、講師の先生にと赤飯をふかしてもちこんでくれたりしたことがあった。しかし、それをやれぬ人たちからということで、会費をとってくれた方がいいのでは、と提案された。それで月額五円、の会費をきめた。正直のところ、当時給料二百円ほどの小学校教師の私にとって、この申入れはありがたかった。が、講師の先生方への謝礼は必要としながらも、私がそれを受けていいものかどうか、しろうと指導者としての迷いがあった。しかし、同年八月には会員が百名を越したことで、会費がなければ運営は困難という現実から、会費をもってそろばん会を運営してゆく態勢となっていた。

こうなると私も大いに責任を感じ、それからは松岡先生たちの都内の塾や、府立二商時代の恩師、高野孝治先生のもとへ、特別な指導をいただきにかけつけた。また暇をみては自習に励げんでいくらかの技能も身につけた。

教室建設

戦後の混乱した世相の中とはいえ、直接戦争の災害が少なかったこの町は、東の段丘上にひろがる横田基地の影響を大いにうけた。畑と雑木林と、わずかの家並の田舎町は、しだいに活気あふれる町へと変身していった。

ぼつぼつ戦場から帰ってきた若者も加わり、青年は家から外にとび出して、青年団活動に優れた業績をあげていった。また、その文化活動にもかなりの力を見せていた。活動の主体は意欲あふれた地元青年と、戦争ゆえこの地に疎開して移り住んでいた、中央からの知識人たちとの交流で育てられた。もちろん、地元関係者の幅広い指導があつたことはいうまでもない。

青年団文化部が結城孫三郎の人形芝居を一小の講堂で公演した。杜子春の脚本家の渡辺渡氏の姿も見えた。読書会員は吉野に吉川英治氏を訪ねた。各町村の青年団対抗演劇大会も盛んだった。スポーツでいえば巨人・国鉄のプロ公式戦が牛浜球場で見られた。陸上競技の隆盛は、岩下先生の影響が大きかった。青年たちは大胆に機をとらえて行動して、知識欲を満たし、活動し

通学生の中には、青年団の読書部員も数人いて、その人たちが先頭になり、仲間に読書のすすめもした。二十五年にしらべたその読書状況が、当時の珠算月報に次のように報告されている。貸出し回数として、

若者の集いの場に

それまでの借用教室だった本町の青年団倶楽部から、現在地に机をかついで引越した時、別科生を中心に生徒全員が手伝ってくれた。庭には地主の森田さんが松の木を植えてくれて、そのまわりへ芝を植えた。その芝は、栄通りから移しかえたものだった。そのころ、栄通りとは名ばかりで石ころがごろごろして草が繁り野芝が一面に生えていた。それを失敬してきたものだ。この付近に家は少なく、夕方など通学する生徒の姿が、はるかかなたにまで見えた。「珠算月報」にのせた生徒への注意事項に、「一、畑途を横切らぬこと。二、作物に手をつけなぬこと。」などである。

て、二十四年八月に現在地に教室を建てた。この教室づくりには、私のその考えを大いにとりあげて賛成してくださり進んで用地を貸してくださった、中福生の森田惣助氏。そして大工さんたちの間をかげずりまわってくれた本町の青柳吉松氏の多大のご協力をいただいたものだ。そして教室玄関には、『福生そろばん塾』の看板をかかげた。



別科生一同にて茶話会
昭和22年（青年団クラブにて）

た。（『ぶっさっ子』第二集・青年団の項参照）
世の中がいくらかおちついて、青年たちの生活の中にもゆとりらしいものが見えてくる中で、こうした活動の外にいた若者たちも、どこかにその集いの場をもとめていた。そろばん会別科が、彼等のそのぞみの一部分を満たしたのが、このころであったろう。福生だけでなく、羽村から青梅から秋川方面から、若者が自転車でもそろばん会に集まってきた。中に高校生もいたが、かなりの先輩者も多かった。せっかく熱心に通う彼等に、こちらまでできる限りのことはと、無いちえと力をふりしぼった。それまで、その教室は青年団の会館を借りていたが、つごうで他地区の町会会館に移動させられたりもしておちつかなかったもので、なによりその本拠地となる教室建設をと決心した。私のためにと親から貰ってあった小住宅を売っ

一、風と共に去りぬ(二十一)二、次郎物語(二十)三、石中先生行状記(十五)。以下、痴人の愛、田舎教師、アンデルセン童話集、リーダーズスタイジエスト、路傍の石、アンナカレニーナ、青春は美し、武蔵野、人生劇場、雲は天才である、若草物語、日本経済の前途、日蔭の村、波、草枕などがある。

そのころ、珠算月報の編集、印刷も彼等に応援してもらった。若者の声ガリ版刷りの頁に、さまざまにぶつつけられていた。野球部を結成して地元学生チームとの試合にもぞんだ。日曜日には教室の机が片付けられ、卓球の練習場にもなって彼等が集まった。

そろばん会で学ぶ若者が、この町にゆきわたっていったあと、町の通学生は、しだいに小・中学生中心となった。そして、別科生は町以外の通学生が主体となった。二十五年にしらべた別科生の町村別の分布がある。(八月度しらべ)

西多摩村(羽村)からが一番で、次に青梅、拜島村(昭島)多西村(秋川)東秋留村(同)平井村(日の出)西秋留村(秋川)三田村(青梅)吉野村(同)水川町(奥多摩)昭和町(昭島)五日市町の順となり、別科生の二割ぐらいが地元青年であった。

このころ、インチキ珠算教師であった私も、いくらか授業にもなれセンセイらしくもなり、日々はりきっていた。しかし、別科生たちには、私は先生扱いはしてもらえず、よき？先輩という調子で「山崎さん」とよばれていた。そこで、こちらは小・中学生の授業では大いに気取った山

崎先生となりすまし、生徒に「こわい先生」とおそれられもした。まず、塾という型の、良い面が強かった時であったろう。

順調に歩んでいた福生そろばん塾にも、その間に多少の波風の高低はあった。また、台風なみの荒れ方もあった。

別科の衰退

二十六年になって、別科に存亡の危機がおとずれた。別科が、働く社会人クラスから、高校生主体のクラスにと、変貌していった時であった。世の中のおちつきと共に、働く人たちには、その職場のきびしさが増し、若者流の気風も変わりつつあった。農業を手伝い、家業にしたがっていたこの町の若者も、つぎつぎと会社づとめを希望してゆき、その勤務地は都心へとうつついていった。彼等の心が、地元をはなれて都会地向きとなり、地元中心の者は、時代おくれと見られたりした。その傾向がはっきりと現われたのは、伝統ある福生青年団の瓦解であった。(『ふっさ子』第二集。福生町青年団参照)

中学を卒業しただけで、近くで働いていたこの町の若者たちに、高校卒業があたりまえとなり、また大学進学者も珍らしくなくなってきた。

福生そろばん会と若者とのつながりも、ここらまでであったろう。このころ、別科生の主体は

高校生となっていた。その人たちがここに求めてきたものは、珠算技能の修得だけであつたろう。もし求められるものが他にあつたとしても、残念ながら私には、珠算以外に彼等に与える何ものもなかつた。

二十七年、福生中学校卒業生の高校進学状況は、全日制へ六十名、定時制へ三十七名。それに対して就職者は、七十八名、家事手伝三十六名であつた。

別科のこの状況に対して、私としては、やはり急激な改変は考えなかつた。働く人が、職場に入つてから、そろばんがでなくては困つてゐるという時には、いつでもこの珠算学校に別科があつて、その要望を短時日に満たせるよう、その受入れ態勢は、いつの時点でも万全にしておいた。

別科生裏ばなし

『珠算月報』第八号（昭和二十三年三月）にこんな記事がある。

「夜遊びとそろばん塾」

そろばんだよと言ってそろばんを抱えて家を出かけるが、そろばんに來たことなしという娘さんがあるそうです。ダンスホールにゆくのに、そろばん塾だよという人もいるそうです。一月二十八日の父兄会でこれの対策を考えていただきましたが、各人の家の中で注意していくこと、となりました。

（当時は生徒手帳や出席表はなかつた。ダンスホールは、昔の蕪買場を改装した芝居小屋がそのころ、ダンスホールとなり、米兵や、町のモダンな若者がかよつたものだ。この場合は、そろばんとは関係ないにせ通学生だつた。）

そして、第十九号には次の注意がのつてゐる。

一、冬期は授業は一日ぬきです。毎晩そろばんをもつて、方向違いの塾に通わぬこと。
一、特別な用事をのぞいては、男性は十時、女性九時までは、帰宅するよう。

二十五年の暮れには、近くに映画館ができた。現在のタマオートの所である。さっそく、そろばんの帰りに映画に寄らぬよう、と注意した。

不幸なことに、このころの福生は、基地の町、赤線の町として、週刊誌などにもとりあげられて悪名をとどろかせてしまつた。農家の納屋も、改装して米兵相手の女に貸すと金になるということで、そんな貸部屋がふえた。

この時期、基地の町という福生のよび名を新聞などで見ると残念でならなかつた。

小学校教師落第記

はじめの方にあつた、私の小学校勤務が、わずか一年しかつとまらなかつたことで釈明させて

いたたく。あの時せっかく、こんな光栄な話をすすめてくれた山崎彦尚先生には、まことに申訳ないことであった。先生には高等科一年生の一年間教えを受けた。この先生はきびしかった。私は小学生のころ、要領がよくて先生に教室で叱られた記憶は少ない。が、山崎先生にはたびたび叱られた。

ある日も教員室で、さんざんお説教されたあと先生が言われた。「おまえ、教師にならないか。師範へ進んでみる。」と。だが、私の父は、大の学校嫌いであった。それを知り過ぎていたのでその場で先生に断った。「俺はうどん屋になる」と言った。そのあと、先生から師範学校の話はなかった。

それから二年たつて、私の父が死んだ。学校ぎらいの父が、死の前年、「夜間部なら中学へ行かせよう。」と言つてくれて、第二商業の夜間へ入った年の七月だった。父の死で、その商業学校を続けるかどうか迷つた時、ためらいもなくあのきびしかった山崎先生を訪ねたものだった。

戦後、軍隊から帰つて、そろばん会を始めたころ、また山崎先生から「先生をやってみる。」という話になった。「時代が変わつた。これからはおまえのような毛色の変つた教師が必要かもしれない」などとおだてられて、身のほどもわきまえず、第一小学校の教員となつてしまった。

しかし、師範出の人とちがひ、名ばかり大学出の私には、その心得も何もない。しばらくは助教で、ということであつた。この時、知らない土地に行つてこうなつたのなら、あるいはそのう

ちに先生という職業が身についたかもしれない。が、生家のすぐ目の前の小学校である。そして、人々には、教師というのは神聖なる職業とあがめ奉る気風がまだ強かつた。そこに、にわかにな「すぐ前のうどん屋の息子が先生だ」ということで、周囲もとまどつたようだ。私にとつて、児童たちとのふれあひは、すこぶるつらいものだった。わずか一年をもつて退職願を出し、学校の先生を落伍してしまつた。

その二 地域社会とそろばん塾

青年教養講座開講

別科がしぼんでから、福生そろばん塾は、当時のどこにもみられた町の珠算塾の姿を目立たせていった。二十六年に、東京都の塾組合である、東京珠算教育連盟に加盟した。

二十九年には、東京都に、各種学校の申請を出し、三月に認可を得て、四月より公認の福生珠算学校を名乗つた。当時、都下には五日市と八王子に一校ずつと、当校を入れて三校がこの公認校であつた。(現在は日野の一校を入れて四校となっている。)

この時、あらためてそろばん会発足時からの、私の教室経営の方針を再確認してみた。それは、この教室にせつかく通学する人たちに、珠算の学習のほかにも、彼等のその学習意欲にいく

らかでも役立ってもらえる場に、この教室を使っていかなければ、という願いであった。話をもとへもどすが、そろばん会を通じて、地域の中で何かお役に立てる行事などを、いくつか実施したものである。

二十三年四月には、都内から応援にかけつけていただいた松岡先生の助言で、簿記講座を開いた。その講師陣が豪華だった。藤田晃司（渡部簿記学校教授）長谷川章（向島商業高校教諭）の両先生を迎え、三月月にわたって指導を受けた。生徒には、別科生をはじめ周辺町村からの青年たちが、熱心に通って大成果を得た。

二十五年には、塾生夏季教養講座を開いた。地元中学校の先生方を講師に迎え、次の教科で学習した。ただし前記簿記講座は、そろばん会の一教科として有料であったのに対し、これ以後の講座は、地域との連携のために、会費無料であり、先生方にもいっさい無料奉仕していただいたものである。

○文学について（詩を中心にして）

山崎愛治

○音楽鑑賞

秋山三雄

○青年の心理

臼井武一

○社会科

村上直

この講座には、のべ三百名をこす青年男女が参加して熱心に学習した。

社会人学級開設

珠算学校になって三年目の三十二年二月は、そろばん会発足から数えて十年となった。このようにそろばん会を発展させていただいた町の人に、感謝の心をこめて、一般町民すべてに参加していただけるような、社会人学級を開設した。

この学級の準備をすすめていく段階で、各方面のご賛同を得た。町の教育委員会、青年団が後援をひきうけてくれた。また朝日新聞社も後援してくれることになった。

以下、その催し順に記してみる。

二月 九日 「絵の話」

五十嵐祥晃

十六日 「若い人の問題で」

清水恒雄・園花フジ

二十三日 「鶏の育て方」

細谷利男

三月 二日 「仮名の話」

関根三木

九日 そろばん一級公開

福生珠算学校生徒

十六日 「郷土の話」

木村東一郎

二十三日 「釣りの話」

水谷清一

三十日 「昔の教育今の教育」 野島カヤ・田嶋定雄
 四月 六日 「母親と若い人の語りあう会」

十三日 「郷土の話」 小野沢博一

二十日 「謡曲の会」 中川敏孝

二十七日 「ガリ版印刷指導」 中松 勝

五月 十八日 「青少年の犯罪」 岸上東三郎

二十五日 「少年のころ」 鮎沢信太郎

六月 八日 「町長さんを囲んで」 秋山誠一

十五日 「大人のそろばん教室」

二十五日 「教育懇談会」

期間中、出席者の平均は二十二名、最高時は鮎沢信太郎氏（横浜市立大学教授）の七十三名だった。また、絵と謡曲の会は、その後、同好会に発展した。

後日、今までの講師全員で、反省の会をもってもらった。その席での主な提言は、
 ① 中学を卒業して間もない人たちへの、社会教育を真剣に考えること。② 講師からすれば、こういう会は公設のものより気軽に出られるし、出席者とも親しみやすい。こんご継続希望ならば、協力を惜しまない。③ 講座の中で、技術面が少なかったのではなかったか、等々であった。

なお、講師各位は、町内の小・中学校の先生が主であったが、町長、警察署長をはじめ、一般町民からもその専門分野で担当していただいた。

まったく善意の講師先生方のおかげで、半年にわたったこの社会人学級は無事終了した。そしてこの地の文化活動に、少なからぬ刺激剤となって終了した。

この翌年、三十三年には福生町文化連盟が発足した。図に乗る言い方になるが、先の社会人学級から生まれた同好会が継続活動していたことなどが、その水源となっていたかもしれない。

『ふっさっ子』第二集・福生の文化連盟、参照

これらのいきさつから、この文化連盟の発会、そしてそれからの活動に関しては、その中心になられた役員諸氏あつてのことだが、私も一庶務係りで、わけのわからぬままに、文化連盟の基礎づくりに奔走した。

市民功労賞の受賞

三十六年の秋、この町の表彰規定による功労者として、文化活動とソロバンの普及に力があつたとして、一般表彰を受ける栄に浴した。

土地っ子意識の強かった私にとって、この町の皆さんからの受彰ということが、何とも晴れがましいできごとであった。

当時、この地域の文化活動に関しては、青梅や五日市とくらべて、福生はおくれをとっていた感じだった。青梅の文化会がとか、五日市の美術展で、などと新聞で見たりすると、なんだい、福生だってそれくらい“なんて思う。そろぼんでは、それらの地から福生へ通わせたことで、内心何かしら満足感があつたようだ。それで毎年秋の文化祭には、一人でポスターをかかえて青梅や五日市へ行き、向うのポスターにならべて福生のをはって来た。ただ、町の文化連盟ともなれば、単なる珠算学校の催しとは、その運営で根本的に異なるものがあつた。何ごとも会のために良かれとしたことが、果して会に益したことであつたかどうか、反省の要が大ありであつた。

こんな例があげられる。町の七夕祭りに対する諸団体の協力を願う、ということでは会合があり、私が会長に代わり出席した。町側から出された催しものへの協力に対する回答を求められて、私は即座に協力を約した。会長からは一任され、またその内容は文化連盟に大いに有利と判断されたからだ。が、同じく返答を求められた町青年団の若い役員からの一言が、私の耳に痛かつた。その人の言は、「とても良いことで青年団も大賛成と思います。が、団に帰って皆と相談してからご回答します。」というようなことだった。

考えてみると、それまで私には、団体とか組織の中での活動の経験がなかった。この日の苦しい体験から、その後、PTAの役員となり、また青少年委員、選挙管理委員会の補充員などを引受けて、私なりの社会勉強に励がせてもらった。

世が変わり町も開けて

時の流れとともに、町は発展を続け、人々の生活は向上していった。いつまでも、土地っ子供りにはばをきかした福生ではなくなつてきた。町の教育委員会に、社会教育課ができて、そこに若く有能な指導者が係りとなり、専門にそれにあたってくれるようになった。

前記のような催しごと、個人ですることの意義と効果についても、疑問とするものが多くなつてきた。珠算学校の仕事も多忙になつた。

三十五年になって、第一小学校をはじめとしてつきつきと小学校にプールができた。町の中に多摩川がありながら、なんのことだと憤慨調だったが、多摩川が汚れてそこで水泳は危険だ、と知るに及んで、そういうものか、と悟つた。柳山に市営プールができてさらにその感が強かつた。

三十九年には、「心のふるさと」として忘れられぬ、福生第一小学校、そして第二小学校の校舎が鉄筋の新校舎につくりかえられてしまった。

かつては、子どもたちにとって最高の楽しみであつた夏祭り。その日、お神輿をかつくまでのあれこれに、どれほどか「ふるさと」があつたのだ。「おれたちのふるさと」ってこんなものだったよ、と語れるものがあつたものだ。それらもほとんど子どもたちのまわりから遠ざかつてし

まった。夏祭りはいまも続けられているが、この日、お神輿かつぎの子どもを集めるために、大人は大苦勞だ。お祭りの太鼓に合わせながら、「あした盆だ、あした盆だ、うん、まいまんじゅうが食える」と大声あげていた戦前の子ども。福生そろばん会でも、この土地の風習にしたがって、ずうっとお盆の十六日はやぶ入り休日をとってきた。それを三十六年からとりやめた。子どもの口から「お盆様だんべ」なんていう声がまるつきりなくなった。毎週日曜日ごとの休日が楽しめる若者。まんじゅうなんか食いあきている子どもたちには、お盆様なんて、まるで関係のないことなのだ。

この地域であきらかに、時代が変わったと思えたのは、そのころからであつたらう。

かつて、そろばん塾の父母会を、地元にあつた映画館を、午前中借りきって開催し、そこには会場にあふれる生徒と父母の皆さんが、喜んで出席してくれた。余興の珠算競技や、その節興業中の映画上映にも、満足の拍手をいただけだ。三十四年の夏まで、その行事は続けられた。が、時代を感じて、三十五年からその催しをうちきった。三十九年には、この映画館が閉鎖された。テレビの方に人気が移った。若い人にはどうせ見るなら、封切り上映の都心の一流館へなどという派手好みが増えた。

父母会が大がかりに開けなくなつて、三十八年からは、この父母会に代えて、月刊「ふっさつ子」紙面に、紙上父母会を掲載するようになりかえたのも、こうした新時代にいくらかでも応じ

られるものへと、考えてのことである。

各種学校に認可されたこと

珠算学校の各種学校認可申請については、はじめ塾の組合である東京珠算教育連盟で、申請の希望者をまとめて指導してくれた。いざ、その申請手続きを始めてみると、これは大変であつた。その書類づくりの面倒なことに、やりきれない思いだつた。

当時の教育庁西多摩出張所へ、何回も出かけて申請書類の指導を受けた。やっとそれがまともつてから、都の私学課へ手続きし、そこで受付が無事すんだ時は、本当にほつとした。途中で、認可なんていらぬいや、と何回も思ったものだ。それから現地での審査を受けた。

審査の日、当時の森田幸造町長さんや大野忠一教育長さんも立ち会ってくれた。審査官が言うには、これらの人の立会いは、私立では珍らしい、と、そのことで大いにこちらを認めていただけ、それからは順調に認可が出た。

昭和二十九年といえ、ようやく人々の生活もおちついてきて、洋裁、語学などの塾の流行しだしたころだ。そろばん塾も、いかに個人の仕事とはいえ、教育の一端にあるものとして、こうした公認施設で、内容・形式ともに責任のもてる運営に努力していかなければ、という自覚であつた。当校認可にあたっては、その敷地面積、教室の広さ、建築基準等で、すべてにあと一歩の

面はあったが、今後の経営努力を、と念をおされて公認されたものだった。

しかし、珠算専科では施設面ではこれが限界である。総合学園化すればその余地はあったろうが、私には、これ以上の経営能力が無いことは明白であったので、ともかく珠算学校の範囲内で、最大の努力を続けた。

ちかごろ、各種学校制度の改革で、専修学校法もできたが、それについても、もうそれへの発展は考えていない。いまでも、多くの人はこの学校に親しみをこめて「そろばん塾」といつてくれる。珠算学校長山崎茂男なんて私には似合わない。塾の山崎が一番ふさわしい。

その二 珠算検定試験

初期の三級合格者

福生そろばん会が発足してから、その年の六月に十二名の会員が東京商工会議所施行の珠算能力検定試験に応じ、三級を受験した。その中から、四名の合格者が生まれて、当校の三級第一号となっている。そして十一月に、井梅シン、奥泉恒子、二見美代の三名が続いて合格。翌、二十三年に入つての六月は、たった一名の三級合格だったが、ここで初めて中学生が合格している。それまでの七名は、いわゆる社会人であり、この会で習う前に、かなりの心得のあった人たちで

あった。が、中学生第一号の細刈米子の場合、まったくの初心からであった。そして、同年十月になると、八人の中学生が三級合格者となった。

二十五年十月には、小学生の三級合格者が登場してくる。小学五年の森愉美子、六年の木村恵子である。翌年二月には鳥海秀子、森田順子の小学五年組がこれに加わる。後のことになるが、ここに名前の出た小・中学生は、その後も努力して、珠算検定最高の一級合格者になっている。

二級・一級もつぎつぎと

二級の第一号は、二十三年の十月、牛尾千恵子（多摩高校一年）が合格した。二十七年の六月とあって、待望の一級合格が出た。細刈米子がこの栄誉者だ。

その当時、三級は、別科生の中から続々と合格していったが、二級合格者は、その百号まで（三十一年十月に到達）に、小・中学生がほとんどで、社会人からの合格者は三名だけであった。なぜであつたらう。

当時の、珠算能力に対する社会の要望が、実務面では三級をもって十分とされていたのが、一つの原因であつたらう。三級合格証を手に入れば、職場においては、立派な資格者として重用されていたものだ。また、二級からの見取暗算種目に、社会人が弱かつたこともある。

かたや、学業の暇に、その能力追求に真剣であつた児童、生徒たちは、当然のように三級の次

は二級に挑戦していった。一級についても同じことが言えた。が、残念ながら、二級そして一級ともなるとだれもが合格とはなれなかった。

試験場の変遷

商工会議所施行の珠算能力検定試験は、戦前から長く実施されてきたが、戦後は、当校生の第一号が受験した、二十二年の六月、その時から復活した。受験するには、東京大学まで出かけるければならなかった。しかし、二十三年六月には八王子商工会議所が試験場を開設し、近くで受験できるようになった。

このころ三田村（青梅市）の三田小学校は、滝島良吉校長先生が、小学校教育の中で珠算指導に力を入れ、八王子試験場まで小学生を多数引率して参加された。児童たちは、背負いかばんにそろばん道具と弁当を入れ、遠足さながらであった。西多摩地域からは、この三田と福生からままとっての受験者があった。この八王子まで出ることが福生は苦にならなかったが、滝島先生はそのつと大変であったことで、東京商工会議所にはたらしきかけて、青梅の試験場開設を希望した。まもなく要望がいれられ、二十五年十月から東京の第二会場として、青梅試験場が設置された。当校生はこの時、八王子と青梅両会場の希望する所で受験させた。

青梅試験場

青梅試験場については、その試験実施にあたって、東京の第二会場ということで、東京商工会議所の試験委員であった、河原日出夫先生ら三氏が泊りこみで派遣されてきて、その指導と進行にあたられた。地元からは、珠算指導の関係者から、田中慶祐氏と私が指名された。また、小・中学校からも委員をということで、中学校は職業科担当から、小学校は数学研究部から指名された先生によって、試験委員会が構成された。

二十五年十月八日、東京商工会議所珠算検定のA会場・東京大学。B会場は青梅小学校。受験料は一級が九十円であった。二十六年からは、六・十月の年二回となっていた施行日に二月も加わって、年三回の試験実施となった。

二十八年六月になって、地元関係者には待望の青梅商工会議所が創設され、同会議所検定が、東京の第二会場をそのままひきついで施行されていくことになった。同年四月には、青梅商工会議所珠算振興委員会が発足し、次の委員が選任され、検定試験をはじめ、珠算教育の振興に寄与していくこととなった。

滝島良吉（水川中学校長） 田中慶祐（塾） 岡野武雄（小河内中学校長） 宮武隆一（平井小） 神山照次（青梅一中） 萩原英治（東秋留中） 黒田開智（大久野中） 水谷光栄（西多摩中） 砂崎彦次郎（青梅小）

検定試験実施上の変遷

二十九年六月に、検定施行規則の一部改正があり、名数において、それまでの銭単位の計算から円単位にと変更された。

三十年六月の第二十四回検定からは、五日市町に青梅の第二会場が設置された。その時点で、試験施行級は六級から一級まで。受験人員は青梅が一、四九二名、五日市が六七一名であった。

三十七年の十一月になり、福生町においても、福生町商工会が全国商工会連合会と共催による、珠算検定を実施することとなり、同月二十八日に初施行された。商工会議所と商工会のちがいはあっても、その内容は同じ検定であることで、当校としては両方の検定試験を受験していくこととした。商工会では、その試験日を商工会議所と約一カ月ずらして年に三回実施とした。その両検定で年六回受験できることで受験者には心理面での圧迫感がうすれ、合格者は増加していった。

四十二年十月、伝票算で和数字による計算問題がなくなった。さらに四十三年十月から、見取暗算の種目が廃止されたことは、受験者に大いに有利となった。年輩者にとっては、二・一級での見取暗算の種目は、まことに苦手であったのだ。

ただし、暗算については、受験種目から消えても、珠算における暗算の重要性は変わるものではない。そこで、東京珠算教育連盟では、この後、暗算検定試験として独自にこれを実施して、受験者も増加している。

合格者の記録から

昭和二十九年。当校が公認校となった時のしらべでは、当校生の三級合格者は四百六名であった。その合格者の通学区域別では、

福生（三〇四）西多摩（二二二）青梅（二二二）多西（一九）東秋留（一四）拝島（八）平井（五）三田（二）瑞穂（四）増戸（二）砂川（二）昭和（二）であった。

また年代別では

一般（六四）高校生（四九）中学三年（九四）同二年（八四）同一年（七二）小学六年（三六）同五年（七）となっている。

現在では、三級合格者はその七割ぐらひは小学校在學生である。この表とくらべると、時の流れを感じさせられる。

また、前記した中で、各記録に名前が出たのは女性ばかりであった。そこで、男性の三級合格者第一号はというと、二十三年十月に、秋山文平がいる。二級では、二十六年六月の和田勇、森

田真弘（ともに高校生）が第一号であった。

一級では、先にも記してあるが、第一号は二十七年六月の細渕米子が第一号。小学生では三十年十月の小宮みさ子（小学六年）がトップだった。市内だが熊川地区からの一号は、同じ三十七年十月の小峰広子（中学三年）であった。男性では、二十九年十月に中根武司（中学二年）が第一号となっている。

なお、一族の高級くらべとなると、志茂の貫井喜代次氏宅が最高のような。兄弟の上から、政子（三）明美（一）美智江（二）信晴（二）健一（三）という合格級だ。また人数の上では、牛浜の井上秀吉氏宅で、美登利、裕子、佳代子、恵弘の四人が三級。真一、哲男の二人が二級と兄弟六人がそろっている。

全種目満点での合格者はきわめて数は少ないが、次の皆さんが記録している。まず一級でごく最近五十一年の六月に加藤克枝が達成している。二級では須田由喜子（四十三年十月）と森田きよ子（四十四年六月）有村佳代子（五十年六月）の三人がいる。三級は、森田旺子（二十五年六月）と馬場桂子（四十二年三月）津川由美子（五十一年六月）の三人である。

高齢者では、三級の橋本雄一（四十四年六月）が六十七歳で合格。二級で、志茂の佐藤三郎（四十五年十一月）が四十九歳で合格した。

なお、五十年六月には遠藤喜久子（中学一年）が一級に合格したが、これは一級合格第一号の遠

藤米子（細渕）の長女であり、輝く親子一級である。

また兄弟一級は、（ ）内は合格年

細渕米子（二七）弘子（三三）。木村恵子（三一）幸子（同）。飯田早苗（三一）ななよ（四一）。原島優（四二）恵子（四五）。坂本千代子（四四）由記恵（四七）。梅田弥須子（四六）普希子（四八）。加藤光代（四七）充代（四九）。細谷尚代（四五）せつ子（五一）。小峰啓子（四八）規子（五一）がいる。

そして、五十年六月をもって当校生の三級合格者数は（商工会議所と商工会の両検定の実数で）四千名を越えた。

好成绩の推進役

そろばん会のはじめのいきさつから、また私のそれまでの経歴から、私はこういう仕事にはずぶのしろうとであった。だから、そろばん会の運営にあたっては、教師であり、用務員であり、事務員であり宣伝係りであり、なんでも一人でやっていた。そしてすべてにおいて、その責任は私にとれる態勢でなければ、通学生にもその父母にも相すまぬこと、という方針であった。

しかし、何年か後、通学生の増加は、なかなか一人ではやりきれぬこと、と知らされてきた。通学生の中に、どこからみても私より指導者に適した人たちが目立つようにもなってきた。それ

らのことをよくよく検討してみると、やはりその人たちの協力を仰いでいくべきだ、との結論となった。

二十四年の八月に、現在の新教室で授業をすることになった時、正式に助手の制度を発足させた。まだ福生では珍しかった二級合格者に、それを依頼した。牛尾千恵子、細渕米子、村野久子の三名であった。三人は珠算だけでなく、学業もその他の面でも優秀な人たちであったので、この制度は大成功であった。続いて男性からも、松永正行、山崎晴男が加わった。

それから、毎年数名の人に助手を依頼し、高校、大学の通学のかたわら、後輩の指導にあたってもらった。私の方針として、助手の条件の第一は珠算検定二級合格者をかかげたが、それ以上に、学業、品行ともすぐれた人をお願いしてきたので、生徒にも父母にも、この制度は好評であった。

ところで、福生第一小学校の教師づとめは、わずか一年で落伍してしまった私だが、その後、自分自身の修業のため、福生中学校の時間講師をつとめることになった。時間講師とはいえ、かなりの時間をそちらにさくことになったので、これらの助手の人の中から、幾人かの人に当校の専任教師になってもらった。公認の珠算学校となつてからは、いっそうこの人たちの力に負うところが大きくなった。こうして、通学する生徒たちと身近な先輩とのあたたかい、交流が育ち、そしてそれがこの珠算学校の伝統の中に、良き力を發揮し続けてきた。

当校の教育成果として、認めていただけるものがありとするならば、常に私の学校運営方針に、最善の協力を示してくれてきた、これら教員・助手の人たちのおかげである。

その四 月刊・ふつさつ子

そのうちに、そのうちに式

先の「そろばん会報・第一号」でのべた、『福生そろばん会報』第一号は、二十二年七月二十三日に出されている。そして、第二号からは、ガリ版刷りで発行したが、それはひどい印刷物だった。そのころ、この会報にご意見を寄せてと、お願いしたら「何も注文はないが、字を読めるようにしてもらいたい」という手紙を一父兄からいただいた。自分で言うのもおかしいが、まことにそのとおりで、今になって読み返してみようとしても、自分でも全文は読めないほどのものだ。それでも、「毎月出せばそのうちに字もうまくなり、文もわかるものになるでしょう」の調子で続けた。そして、こんな調子が、すべての私のやり方であつて、それは本業でも同じである。

とにかく、こんな調子でやっていたものを、二十五年の七月から、羽村の昭和印刷に依頼して活版刷りにした。編集方法も方針もなしで、適当に集めた原稿をそのまま印刷所にまわし、向う

でまとめてくれた。

まもなく、謄写印刷の業者と知りあい、二十六年一月から二十七年の十月までそこに印刷をまかせた。が、当時の教員で牛尾千恵子が達筆だったので、次の十一月から牛尾がガリを切り、私が印刷をしてつくりあげた。しかし、なんとしても活版の方がよいということで、三十年の七月に再び昭和印刷にもどって、『そろばん塾月報』を続けた。

二十九年四月に、福生珠算学校が公認となって、この月報はそこで『福生珠算学校月報』と名称変えをしている。さらに、四十四年五月、この月報をまとめた『ふっさつ子』第一集の発刊にともない、そのよび名の親しみやすさがよいということで、四十七年一月に『月刊・ふっさつ子』とあらため、現在に至っている。

毎月一日発行で

もともと編集などはまずかったが、毎月一日発行には努力した。二十号までぐらいでは二カ月の合併号などあったが、あとは確実に毎月一日を守ってきた。それだけは自慢したい。それがやれたのは、へたなりに編集・発行を自分だけでがんばったことだろう。また、原稿を依頼された先生方が、この私のやり方に協力していただいたことで、このようにやれた。

配布先はもちろん生徒の家庭に、である。ほかに、市内の学校はじめ諸団体や私の知人、恩人などに届ける。知人宅には、暇をみて自転車で、新聞配達の様子で歩く。行く先でお茶など出されれば寄りこんでしゃべってくる。それが楽しいことであり、また編集の資料もいただける。毎年一回、この紙面で「紙上父母会」という、父母と子どもの対話を行なっているが、この際の『ふっさつ子』への父母からの反応には編集者として大いに励げまされる。それによると、第一頁の「子どもの意見」が大好評なのだ。そして、郷土史や連載ものの記事に、人それぞれのご愛読ぶりも伝えられてくる。

皆さんのご協力を得て

このごろの編集の型として、一頁は「子どもの意見」（年に一・二度、おとなの意見）、二頁は珠算学校関係記事、三頁が町の話題、四頁はつづきもの、となっている。子どもからの投稿マンガもよるこばれている。

特集記事には、子どもの意見以上に、この『ふっさつ子』に愛読者をひきつけてくれた。また『ふっさつ子』が福生の人だけでなく、広く各地の人に関心をもたれる理由となっている名文が多い。今は、これらの頁が貴重な郷土史資料となっている。

一〇五号より一五六号まで「わんぱく時代」（田村福一ほか）一二六号より一四四号「福川先生覚書」（岩下伴蔵）。一三六号より一五六号「教育相談室」（宇野一）。一二七号より一五三号「福

生むかしむかし」(藤谷重三郎・唐沢健二)。一八三号より一八九号「同」(小野沢博一)。一四五号より一五一号「民話を読もう」(加藤哲郎)。一八八号より二〇〇号「上水ばなし」(坂上洋之)。
 一九六号より二〇八号「チェコだより」(設楽清)。一七一号より一八六号「子どもとおとな」(田嶋定雄・亀田宏)。二五〇号より二五三号「俺と親父がぶつかっている事情」(青年と父母有志)。
 二五五号より二六九号「福生町の植物」(内田二)。二五六号より二七七号「福生、熊川村の領主、ほか」(村上直)。三〇一号より三二〇号「野鳥の広場」(栗原七)。三一八号より三二九号「福生村の玉川上水工事」(村上直)。三二一号より……「戦後史の断章」(新井勝敏)。
 ほかに一五〇号の「福生町のPTA」(町内PTA会長)。二〇〇号の「福生町の社会教育」(町社会教育委員)。二七〇号より二七四号の「ふっさっ子を語る」(石川昌一ほか)。などの座談会もある。このほか、一回でというものはここに発表を略させていただくが、これらについても貴重なものが多い。

『子どもの意見』で人気上昇

「子どもの意見」の見出しをならべてみれば、これも一つの時代色になっていると思う。この毎月の標題には、少し苦心はしているが、それだけにこの福生の子どもたちの生活記録として、後世役立つものになるかもしれない。それを生かしてと思い、『ふっさっ子』第一集と第三集を、こ

の『子ども意見特集』にしている。ただこうなると編集者の質のひくさで、それをうまくまとめきれない。申し訳ないことだ。

ときに、卒業していく生徒の家から、こんな手紙をいただく。「このたび珠算学校を卒業できることになった。ところで残念なのは、もうすっかりおなじみになってしまった『ふっさっ子』ともお別れしなければならぬことだ。」

編集者への思いやりのあたたかさに、感謝したい。

その五 反省と、新しき道標と

戦後間もなく、青年たちをそろばん会に集め、そこで簿記講座や中学の先生たちによる教養講座などを開いた。あのころの彼等の真剣な学習ぶりから、若者たちはそろばんの教室に通って、何か満たされるものがあつたと思う。やがて、若者たちは、勤務のつごうなどからこのそろばん会と縁が切れていった。次の時期、高校生の年代が別科生を中心に変わった。そのころ、私自身に、彼等と話しあえ、それに応じられる思想があつたなら、福生の土地柄にかなりの影響をあたえ得ただろう。さらに、そのころ、ひそかな夢を現実に近いにつけるための何ものもおそれぬ大度胸がそなわっていたら、青梅線の中心地福生に、独自の校風を誇る、私立学園の創設を手がけられ

だが何もできなかった。

ときに気まぐれに、力を、智識を蓄えてなどと、殊勝な内からの宣言をしてみたのだが、それが行動には結びつかなかった。そんなだらしのなさなのに、ただがむしゃらだけしかもち合わせのなかった人間が、そろばん教師とはいえ、先生とよばれる仕事を続けられた。『ふっさつ子』という新聞を出し、それを本にまでしてこられた。そんなあつかましさをおし通せたのも、ふっさつ子の、ふるさとの、その愛情にかこまれての幸運に恵まれて、であった。

家庭において、三人のわが子が成長の段階では、この福生へのご恩がえしにもと、文化連盟をはじめ、PTAなどでの奉仕活動に熱を入れた時代があった。それは三十年ごろから、PTAを退く四十一年までで、私なりの誠意をつくしたつもりである。

そのあと、なぜかそうした社会と縁が切れた。最近の十年間は、珠算学校にとじこもっている。

今、私に一つの努力目標がある。福生珠算学校を市内の公立校なみに、というねらいをもって。何も制度上で公立に準じようというようなことではない。子どもを、珠算学校に通学させてみて、こと珠算教育に関しては、公立校に抱くものと同じ安心感のもたれるものに、という意味だ。思いあがりも甚しいと言われようが、そこに到達させるための努力を、福生の皆さまにお誓いしたい。

さて大まとめとして、それでは“ふっさつ子”とはなんなのだ、と聞かれたら、どう答えるべきだろう。その答を最も正確にお答えできるよう、『月刊・ふっさつ子』を千号まで、またこの『ふっさつ子』を第百集まででも続けてみることに、これも私のこれからの努力目標である。